

コラボレーション手法によるメディアミックス授業の展開

染 岡 慎 一

On the Development of Mixed Media University Classes on Collaboration Methods

Shinichi SOMEOKA

要 旨

魅力的な大学での授業の構築の試みについて、コラボレーション手法を導入した実践的授業を実施した。本報告ではコマーシャルベースの音楽CD制作をともなう授業、マスメディアと協力、番組制作を授業時に行った実践について報告する。

キーワード：授業、メディアミックス、コラボレーション

1. は じ め に

アクティブラーニングの導入、ラーニングコモンズの設置等、大学教育においてlearningを学習者中心の教育を行うという意味で使用した手法の導入が盛んに試みられている。17世紀から今日まで教育方法のいわば主流である系統学習に対して20世紀初頭に登場した問題解決学習の手法が教育改革の手法としてしばしば脚光を浴びてきた。小中高校の学習指導要領は問題解決学習の手法を重視したいわゆる「ゆとり」型から、系統学習を重視するいわゆる「詰め込み」型に舵を切っているが、大学教育もまた、欧米の大学生に比べて机に向かって勉強する時間が短いと言われる中、授業そのものの改革も求められている。

先述のアクティブラーニングやラーニングコモンズに限らず、大学教育の改革は1990年代から進められており、シラバスの作成、公開や授業評価の導入に始まり、FDやSDも盛んに行われるようになった。

今日ではほとんど見る事ができなくなった古典的な教授方法も含めて、大学の授業の質をどのように向上させるかという目的で様々な試みが行われている。筆者はこれまで高品位デジタルメディアの教育利用を試みてきた。これらのメディアを使用することによりコマーシャルクオリティの成果物を授業で直接産み出す事が可能となった。本稿では筆者が試みてきた具体的な成果物を産み出すコラボレーションによる授業について報告する。

2. 高品位デジタルメディアを使用したCD制作・販売をともなうコラボレーション授業

録音や映像収録等のメディアのデジタル化は、アナログの時代と比べて高品位コンテンツの創出を可能とし、業務用機器とコンシューマー機器の性能差をも吸収した。その結果、プロフェッ

シヨナルでなくても従来プロフェッショナルが使用してきた機材を誰でも入手し使用できるようになった。録音環境については特にその傾向が顕著であり、従来は専門的に構築された業務仕様のスタジオを使用しなければできなかった音楽制作が自宅のノートPCのみで制作できるようになり、実際にプロの音楽家でもそのような環境で制作活動を続ける例もある。

同様に大学の実習用の設備を行う場合も汎用のパーソナルコンピュータや記録ディスク等のデバイスが利用できるため、アナログ時代に比べると録音機材導入に関わる費用を低く抑えることが可能となった。

2005年4月、現代ビジネス学科一期生の3年次に開講されるメディア系授業実施に必要なスタジオ機器の整備が行われた。整備されたスタジオは映像収録、音楽録音兼用スタジオであり、あわせて「音声情報処理演習」においてCD制作の準備も進められた。

音声情報処理演習は現代ビジネス学科のIT・マルチメディア領域の専門科目として開講されたが、音楽CDのビジネスモデルも合わせて学ぶことができる授業となった。販売用のCDを制作するには通常約100万円かかると言われている。その中でCDのプレス、ジャケット印刷等にかかる費用は500枚分の材料費を含めて15万円程である。残りの費用のほとんどはスタジオや機材のレンタル料である。本学で整備したスタジオ設備は十分なクオリティの録音を行うことが可能であるため、CD制作を計画しているプロフェッショナル・ミュージシャンとコラボレーションし、昼間は授業用の楽曲と演奏を無償で提供してもらい、夜間は彼らのCD用の録音を無償で行うことで双方ともに成果物だけが残るという方式である。

2005年に実施された「音声情報処理演習」の授業では、プロのジャズミュージシャンをお招きし、授業用の録音・演奏を3曲提供してもらい、CDの作成を行った。そのうちの一曲は本学のために提供されたオリジナル曲であり、「キャンパスを吹き抜ける風をイメージした」というキャッチフレーズで“Feel the Wind”というタイトルとされた。“Feel the Wind”は、その後この授業で録音されるオリジナル曲の共通タイトルとなった。



写真1. 2005年の録音

音楽CDを制作するには、録音された楽曲に加えてジャケットデザインが必要である。2005年当時の受講者は、ジャケットデザインに必要なイラストレータ等のアプリケーションを学んでいなかったが、フォトショップの使用経験があり、レイヤーを活用した編集はできていた。この授業では録音、ミックスダウンと合わせて、ジャケットデザイン、レーベルデザインの実習を行い、発売用のCDのジャケットデザインは裏表に分けて、学生たちによるコンペで決定した。



写真2. Feel the Wind 2005

2005年10月、フルカラージャケットの製品版が500枚制作され1枚1千円で発売した。音楽CDの流通はメジャーレーベルのルート以外は専門のディストリビュータ（問屋）を通す必要があるが、CDショップの店頭で直接並べるには制作費以上の費用が必要であり、プロモーションの費用を見込む必要がある。一方、CD販売店と直接委託販売契約を結び店頭においてもらう事も可能である。2005年版ではCDコーナーを持つ楽器店、書店に1枚当たり30%の手数料で委託することができた。2005年半の1年間の販売枚数は約100枚。手数料を引いた約7万円（大学の雑収入として計上）を回収することができたが、CD制作にかかった費用約15万円には及ばなかった。

3. 音楽CD制作学生ベンチャープロジェクト

筆者のゼミの学生でこの授業の受講者を中心に音楽CDを制作するベンチャープロジェクトが立ち上がった。スタジオ、機材と授業で身に付けた録音技術、ジャケット等のCD制作技術を使ってストリートミュージシャンのCDを制作するプロジェクトである。このプロジェクトの企画書が広島ベンチャー育成基金の学生賞を受賞し、この賞金5万円を元手に実際にCDを制作した。



写真3. 学生ベンチャーによるCD制作プロジェクト

広島ベンチャー育成基金の紹介でCDショップと委託販売の契約を結ぶ事ができた。この手続きの中で、商品バーコード（JANコード）が必要であったためプロジェクトとしてコードを取得した。



写真4. 学生ベンチャーにより制作されたCD

本プロジェクトで制作されたCDは手売りも含めて最終的に700枚以上を販売し、ベンチャー育成基金の賞金も合わせて制作費用以上の資金を回収する事ができた。

4. CD販売ビジネスモデルの終了

音声情報処理演習は、前期末の集中講義として2010年まで続けられた。この授業が始まった2005年は100枚のCDが販売され、CDを購入した学生もいたが、5年間で音楽ビジネスが大きく様変わりした。特に2007年のiPhone発売以降、音楽はダウンロードして購入する事が一般化し、手に取る事ができるCD制作の意味が徐々に失われる事となった。実際2010年版の

CDを購入した学生はゼロであった。

音楽をデータとして販売するモデルは、より高品質な音楽を安価に手軽に供給出来るが一方でジャケットも含めた物造りや音楽の楽しみ方そのものまでも変えてしまった。音声情報処理演習の授業はCD制作の費用を毎年確保する必要があるが、音楽ビジネス環境の変化にともない2010年の授業を持って終了した。



写真5. Feel the Wind 2010 制作

5. 業界直結型の授業「eビジネス」の実施

2003年に開設された現代ビジネス学部現代ビジネス学科の専門科目のうち、ビジネスの現場の声を直接授業で聞くことを目的に、IT業界で現職のまま実務家教員として非常勤講師にお招きする「eビジネス」の授業を企画した。広島でもIT業界では起業によりビジネスを展開する

ケースは少なくない。この授業でも様々な分野の講師のリレー講義方式を徐々に取り入れた。その結果、単にeビジネスにかかわる内容だけでなく、起業から経営までの多方面にわたる講義が展開された。

6. メディア横断型オムニバス授業「マスメディア総論」の実施

2010年、現代ビジネス学科のIT・マルチメディア領域に新しい専門基礎科目を設けることになった。IT・マルチメディア領域には新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等のマスメディアを学ぶ科目がなく、ユビキタス時代の到来にともないマスメディアのビジネスモデルがどのように変化したかも含めて現場のプロフェッショナルにリレー方式で直接話を聞くという授業を企画した。

2011年後期、スポーツジャーナリストの中野和也氏の講義から始まり、新聞（記者）、雑誌（編集者）、ラジオ（パーソナリティ）、テレビ（ニュースキャスター）から映画（プロデューサー）まで、現場の話を中心とする授業展開を依頼したが、制作の話よりも、時代が変わる中、各メディアがどのようにネット社会の進展に向き合い、それぞれのビジネスモデルを維持発展させるかという観点が各回共通のテーマであった。2005年から実施していた音楽CDの制作・販売をビジネスモデルとする音声情報処理演習の授業が音楽流通のシステムが変わったことにより授業が続けられなくなった事例と同様に、各メディアを取り巻く事情も大きく変化している時期であった。

雑誌業界は雑誌そのものの売り上げが落ちる中での付録商法の将来性の講義や、映画産業が映画の作成から配信まで複雑なビジネスモデルを展開するのか等、単にメディアの実情の講義だけでなく、メディア業界のビジネスモデルを理解する授業となった。



写真6. マスメディア総論2011

7. 共通教育「現代社会と人間A, マスメディアと地域社会」の実施

2011年に開講した「マスメディア総論」（1年次対象）は、現代ビジネス学科のカリキュラム改変により2014年後期の授業をもって終了した。

「マスメディア総論」はユニークな教授陣で実施されたが、この教授陣による授業をベースとして、従来のビジネス志向から共通教育向きの内容にシフトした新しい授業を開講する要請をうけ準備を開始した。

授業の開講は前期。共通教育「現代社会と人間A」が講義名であったため、副題を「マスメディアと地域社会」とし、シラバスを再構成した。

表1. 現代社会と人間A マスメディアと地域社会 シラバス・開講計画

	実施日	講義タイトル(担当者・所属等)
01	4月6日	イントロダクション「マスメディアと地域社会」の概要(染岡)
02	4月13日	マスメディアのしくみ(染岡)
03	4月20日	新聞と地域社会(園部貴之・中国新聞社)
04	4月27日	ジャーナリズムと地域社会(中野和也・スポーツジャーナリスト)
05	5月18日	ラジオと地域社会(下村幸嗣・広島FM)
06	5月25日	ラジオと地域社会(北別府学, 原田稔・ラジオパーソナリティ)
07	6月1日	テレビと地域社会(石井百恵・テレビ新広島アナウンサー)
08	6月08日	テレビと地域社会(渡辺美佳・広島ホームテレビアナウンサー)
09	6月15日	テレビと地域社会(小林康秀・RCCアナウンサー)
10	6月22日	地域とメディア(匹田篤・広島大学, メディア論)
11	6月29日	地域とメディア(原田稔・CMディレクター)
12	7月6日	地域とメディア(匹田篤・広島大学, メディア論)
13	7月11日	地域とメディア(匹田篤・広島大学, メディア論)
14	7月13日	映画と地域社会(佐倉寛二郎・映画プロデューサー)
15	7月27日	総括・試験(染岡)

授業当初は筆者が担当し、「マスメディアのしくみ」では、旧マスメディア総論の授業内容をまためた各メディアの歴史、今日の日本での収支構造さらに最近の動向までを比較テーマとし、各メディアの特徴を解説する授業を実施した。



写真7. マスメディアと地域社会・石井百恵アナウンサーによる授業

8. ラジオ番組とのコラボレーション授業

この授業の第6回目、5月25日に実施されるラジオと地域社会のテーマは「ラジオパーソナリティの仕事」であった。前回の5月18日に実施されたラジオと地域社会の授業は、メディアとしての現状、動向の話題が中心であり、実践編として、ラジオパーソナリティの仕事及び番組収録の実際を学ぶ計画とした。

対象番組は、広島エフエム放送で毎週土曜日の午前9時よりオンエアされている30分番組、「北別府学の裏ブログ」である。本番組はラジオパーソナリティとして北別府学氏と原田稔氏の二人による対話を中心に構成され、基本的にはスタジオ収録で制作されている。

ラジオ番組の録音はテレビ番組の収録に比べてコンパクトな機材、スタッフで実現可能である。

そこでラジオ番組収録のそのものを授業時間内に行い学生はラジオ番組収録そのものを観察でき、番組としては学生参加の番組収録が完結できるよう調整を行った。通常、学生が観察実習を行う場合は現場に学生個々に向く必要があるが、本実践は、現場が授業時間帯に教室にやって来るものである。

2015年5月25日番組の収録を兼ねた授業が実施された。ラジオパーソナリティの北別府学氏と原田稔氏が非常勤講師として授業に出講し、同時に「北別府学の裏ブログ」2015年5月29日オンエア用の番組収録を実施した。収録にあたっては担当ディレクターが1名来学し、機材設営と収録を行った。収録前の時間が空きコマとなっている受講者の学生2名が手を挙げ、AD（アシスタントディレクター）として機材設営準備や収録操作の補助を行った。



写真8. 授業前2名の学生ADが参加し担当ディレクターの元で収録のセットアップ

収録と兼ねた授業は2コマ目の時間帯（10:40～12:10）であった。同じ教室で前の授業が行われていたため、機材セッティングが授業開始後も続けられていたが、解説を入れながら作業する事によって準備作業そのものが教材となった。

その後、準備が整い次第収録に入ったが、収録用トークが1時間にわたって行われた。収録終了後、この授業のための質疑応答時間が設けられ、学生達から多数の質問が寄せられた。



写真9. 番組の収録

授業の中で収録されたトークは30分の番組枠に収まるよう編集され、5月29日にオンエアされた。受講した学生は1時間に渡る収録トークとオンエアされた番組を比べる事によって、「編集」作業をも学ぶ事ができ、ラジオの番組制作そのものを学べる授業となった。

番組収録を機動的に行う事ができるラジオの特性から大学の授業時間枠に収録現場を物理的に持ち込むことが可能であり受講生は教室で直接ラジオ制作を学ぶことが可能となった。一方、ラジオ側はそこで放送用の番組のコンテンツとしての魅力を付加した上で番組を収録することが可能であった。大学の授業を広い意味でのメディアであり、コラボレーションによるメディアミックスは両者とも魅力的なコンテンツの提供を実現できるものである。

参 考 U R L 等

ラジオとのコラボレーションにより実現した番組は、広島FM放送、「北別府学の裏ブログ」の番組サイトで聴く事が可能である。

<http://hfm.jp/blog/kitabeppu/2015年5月30日放送分> 参照

<https://youtu.be/ay4utHYQK6E>

[2015. 6. 25 受理]